沖縄文化の特質と伝統工芸品

沖縄県浦添市立仲西中学校
西里　良輝

一、独自性の強い沖縄の文化

県立博物館に「万国津梁鐘」が保存されている。この鐘は一五世紀の中ごろに鋳造され、「首里城正殿」にかけられたもので、当時の琉球王国の活気にみちた繁栄のようすを、次のように刻んでいる。

琉球国は南海の勝地にして、三韓の秀を鍾め、大明を以て輔車となし、日域を以て脣歯となす。此の二の中間に在りて湧出する所の蓬莱島なり。舟楫を以て万国の津梁となし、異産至宝は十方刹に充満せり……

なんと自信にみちた、国際的な視野に立つ発想であろう！

沖縄県は、たしかに、日本列島から遠く離れた、わが国の最南端に位置しているが、東アジア世界の中では、地図に示されるように、周辺諸国のほぼ中間に位置するすぐれた地理的位置を占めている。[注1]

沖縄の人々は、この利点を生かして、古くから日本本土とは唇と歯のように近しい関係をもち、また、中国とは車軸と車輪のように密接な関係を保ちながら、朝鮮・東南アジアの国々[注2]ともさかんに交易を行った。そして、舟で海を渡り、万国のかけ橋になろうという意気込みを示したのである。一五世紀を頂点とする琉球の中継貿易は、このように展開されたのであった。

こうした周辺諸国との交易によって、日本本土をはじめ中国・朝鮮、東南アジア諸国の美術工芸品やいろいろな技術などが輸入され、やがて、それらが在来の文化と融合して、日本文化の中でも独自の地位を築いているといわれる沖縄の文化が形成されたのである。そして、この独自性の強い沖縄の文化は、沖縄の気候・風土と人々の心にはぐくまれ、また、長い間つづいた中国・薩摩との関係[注3]の中で洗練され、現在に伝えられているといえる。

二、沖縄の伝統工芸品

この沖縄文化の要素は、今日、観光沖縄の地場産業として着実に伸びている。陶器・漆器・染織物などの伝統工芸品にも、色濃くあらわれている。

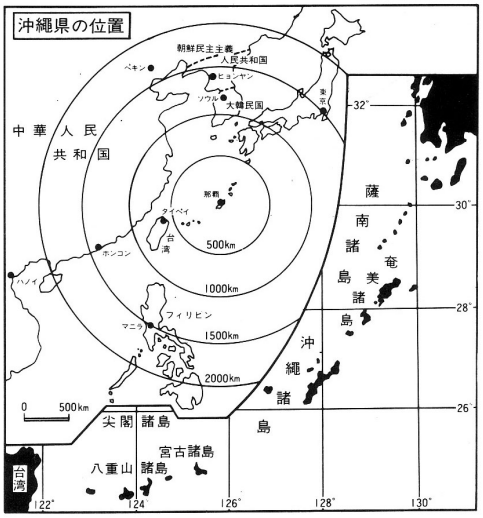
沖縄の陶器の代表は壺屋焼である。那覇市の市街地の一角にある壺屋を中心に今もつくられているこの焼物は、丈夫さと温味のある品質で高く評価されている。

沖縄の陶器は、はじめのころ、南方の陶法をとり入れた「南蛮焼」が主流で、古我地（名護市）、喜名（読谷村）、知花（沖縄市）、湧田（那覇市）などで、おもに水がめ・酒がめ類が焼かれていた。と

●注1
太平洋戦争後、二七年の長きにわたって沖縄を支配した米軍は、このすぐれた地理的位置を「太平洋のかなめ石」と評した。復帰後の今日も、日米安全保障条約に基づきわが国におかれている米軍基地の五三%が、沖縄県に現在しているのも、このことと関係している。
また、幕末の日本を開国に導いたペリーが、浦賀来航よりも四〇日前に那覇に入港し、日米和親条約が結ばれるまで、通算五回も沖縄に来航したのも、この地理的位置に強い関心をもったからであった。

●注2
琉球と交易した東南アジアの国々を現在の国名でまとめると、ベトナム、カンボジア、タイ、マレーシア、シンガポール、フィリピンとなる。

●注3
中国とは、一五世紀初頭に中山王武寧が中国皇帝の冊封を受けたことにはじまり、一九世紀後半までの約五〇〇年間は、冊封体制のもとで結びついた。また、薩摩とは、一七世紀初期の島津氏の侵入以後、明治の初めまでの約二六〇年間、その支配下での関係がつづいた。

●注4
柳宗悦は、『琉球の富』のなかで、「世界最上の染物・織物」と紅型・琉球絣を絶賛した。

ところが、一六〇九年に島津氏が侵入して沖縄がその支配下に入ってからは、海外の陶磁器が自由に得られなくなり、上質の焼物を国内で生産する必要に迫られた。そこで、首里王府は、薩摩を通して朝鮮の陶工を招いてその技法を習ったり、平田典通を中国に遣わして赤絵の技法を学ばせたりした。そして、一七世紀の後半には、各地にあった焼窯を現在の壺屋に統合して、役人の直接管理下で、壺屋焼が生産されるようになったのである。
その後、一八世紀の初期には、薩摩焼の技法も壺屋に伝えられ、南方・朝鮮・中国・薩摩の陶法を消化、融合して沖縄独自の陶器がつくられるようになり、現在にいたっている。
漆器は日本本土から伝来し、陶器よりも早く発達した。一六一二年、首里王府は貝摺奉行を置き、厳しい監督の下ですぐれた製品を生産し、薩摩や江戸幕府への献上品などにあてた。
沖縄の漆器は、軽くて乾燥にも強いデイゴやシタマキなどを材料に用いた丈夫なもので、高温多湿の気象条件でしか出せないといわれる鮮やかな朱色や深みのある黒色などの色彩と、堆錦という独特な技法に特色がある。
堆錦は、うすくのばした漆から図案にあわせて模様を切りとり、漆器にはりつけていく装飾法で、一八世紀に比嘉乗昌が中国の技法をもとに発明した、沖縄独特のすぐれた技法である。この方法でつくられる漆器は、長年使っても模様がはげたり色がさめたりすることがなく、磨くほど艶が出て美しくなるという特長がある。この技法によって、沖縄の漆器はいちだんと評価を高め、一八世紀の後半には数人の漆工が技術指導のために薩摩に招かれた記録ものこっている。
漆器は今日も、民芸品店などに盆・菓子器などが陳列され、みやげ品として重宝がられている。
沖縄の染織物には紅型、芭蕉布、首里織物、久米島紬、宮古上布、八重山上布、読谷村花織、琉球絣などがあり、種類の豊富さとその美しさは「世界最上の染物・織物」[注4]と絶賛されるほどである。
大胆な色彩と力強い図柄に特徴がある紅型は、沖縄で生まれ育った染物で、友禅とならんでわが国を代表する染物でもある。その歴史は一五世紀まで遡るが、図柄は色彩からみると、はじめインド・ジャワなどの南方の更紗の影響を受け、一七、八世紀には、王府の保護の下で、中国の染色の技法や京都の友禅染の影響を受けて発展したものと考えられている。
紅型は、古くは王や士族の衣装として、また、中国や薩摩への貢物として用いられた。なお、琉球舞踊の衣装に欠かせないのは現在もかわらないが、今日では、女性の晴着にも利用されており、テーブルクロスや壁かけなどは観光みやげ品としても人気がある。
一方、宮古・八重山の上布と久米島紬は、薩摩への貢納布であったため、役人のきびしい監督の下で強制労働によって織らされた苦しい歴史をもっている。それゆえに、他の織物類に見られない精巧さと気品がある。とくに、宮古の紺細上布は、日本の麻織物の最優秀品になったこともあるほどで、その織りの美しさは、他の織物同様今も伝統の技法として受け継がれている。